

ハイクは命を詠むアート

1 7 シラブルの宇宙

ハイクは自分自身と人生への洞察をもたらします。

それもたった3行、17シラブルで。

日本の俳句を読み、自分でも作ってみてください。

きっと英知の扉が開くことでしょう。

ハイクは5, 7, 5シラブル、3行の詩で、季語がひとつあり、一息で読み切れる。

ハイクのルールは簡単だが、同時に多くの意味を含有する詩型ともいえる。ハイクは実に広大でつかみきれないことを語るものだからだ。つまり私たちの内部と私たちを取りまく世界との繋がりを語るのだが、いったいそれをどう言葉に表すことができるだろうか。

ハイクの背景にある哲学は禅仏教と道教（タオイズム）だ。この東洋の世界観は大きい世界と小さい世界をひとつのものとして捉える。私たち人間を大きな宇宙の中で捉えるのだ。マクロとミクロの世界は一つである。この二つの世界はお互いの鏡なのだ。一匹の蜂の眼に宇宙を見ることができる、それがまさにハイクの意図である。なにか小さなものに焦点を合わせる、シンプルで日常的なもの、例えば蜂が花から出てくる、葦が風に揺れる、そんな

ものを見て突如新しい別の眼で世界を見ることができる。まるで初めて見たり、感じたり、経験したような気がするだろう。霧が一瞬にして消えてしまい、はっきりした光景と澄んだ世界が突然現れるようなものだ。なにかに触れて、それが在るべきところに在るのだということ、そしてそれが価値がある本質的なことなのだというを発見することになる。それはあなた自身のことかもしれないし、あなたの人生のことかもしれない、もしかしたら、生命そのものかもしれない。

日本人でオランダ国籍、アムステルダム在住の富田冬子氏（以下ふゆこと略）は、著名な俳句の詩人だ。彼女の作品は日本の全国版新聞によく掲載され、多くの人々が彼女の俳句を読むことができる。彼女はこの小さな詩型がいかに大きな力を発揮することができるかをよく知っている。いったいハイクはどう作るのか、そしてどう解釈す

るのか、以下作句の七つのステップを紹介しよう。

1) 人生の軽み

ハイクのハイは軽みという意味だ。‘陽気な詩’というような意味で、最初は数人の者が次々に句を重ねてひとつの詩を作るという連句から始まり、その最初の節が独立して俳句となった。17世紀の歴史的に有名な松尾芭蕉という僧は俳句を改革し、深い意味を込めるようになった。彼の俳句はうわべだけのものではなく、彼のイメージはシンボルでもあった。彼の詩はシンプルではあるが、まさにそのシンプルなことにこそ命の本質を籠めようとした。彼の一番有名な俳句、

「古池や蛙とびこむ水の音」

というのがある。静かな水面の奥深くにはハイクの世界が広がっている。

ふゆこ氏は言う。「ここオランダでは、よくこんな言葉を聞きます。「ああ、ハイクね、自然を描く短い詩のことね、だからってなんででしょう？」って。残念です。自然を詠うというのは一つの流派にすぎません。私は、自然というのは人間に相對する、つまり人が距離をもって自然を見るという意味ではなくて、人間も自然の一部分であると理解しています。花が咲き枯れるように。ですからハイクは命のことを詠うのです。ハイクの深い意味を読み取ろうとするのは価値あることです。ハイクは例えるならフェルメールやゴッホの絵のようなものです。それだけで美しいのですが、絵の中のシンボルや作者の人生や背景を知ると、もっと深く鑑賞できます。」

2) 17 シ・ラ・ブ・ル

ハイクのルールによると、5, 7, 5シラブルで3行の詩ということになる。最初にハイクを作り始める時は5, 7, 5のリズムに慣れるまでこのルールを守ることが大切だ。ふゆこ氏は言う。「とにかくこのルールをしっかりと守って、たくさん作ることです。作っていくうちにリズムが体の中に定着します。そうすればそのリズムと遊んで楽しむことができるようになります。」そうなるともうシラブルの数はあまり問題じゃなくなる。結局大切なことは、リズムとそれを破るところにある。一句のなかには「間」というものがあって、そこで息をつくと連想が飛躍する。

ふゆこ「日本の俳句は一行に書かれています。その中に切れ字というものがある、流れがそこで一時切れます。オランダ語でしたら、考えを暗示するハイフンとか、感嘆を表す(!)とか、ため息を表す「ああ、」とかを使ったらいいでしょう。」

有名な芭蕉の俳句、古池やは、「水の音」と訳さずに、「ポチャン(水の音自身を擬音であらわす)」と訳すこともできる。シラブルの数は少ないのだが、ユニークなハイクになるだろう。

ふゆこ「ぱっと心が飛躍する驚きの瞬間、なにかを連想する瞬間、なにか美しいとか哀しいとかを思い起こす瞬間、それがハイクモーメント(訳者注ここオランダで定着している言葉)ということなのでしょう。」

3) 言葉以上のもの

日本の伝統的な俳句は一句の中に季語という言葉が入っている。季節を表す言葉、例えば花が咲く（春）、蚊（夏）、台風（秋）、などだ。季語は鍵になる言葉で、深く広い意味が込められている。例えばオランダでは「シンタクラ - スの夕べ」といえば、みないろいろなことを想像するだろう。シンタが来てドアをノックするときどきどきする瞬間、子供たちがプレゼントを開けて歓声を上げる、そして近年の黒人ピート討論（訳者注 聖者クラスはスペインから来るのだが、お伴に黒人を連れてくる。この黒人のキャラクターがうすのろのコメディアンのようになっているので、人種差別であるという世論）季語はそれひとつだけで背景がよくわかっている読者にはそれだけですすでにある種のフィーリングを誘発する。陽気な春の気分、暑苦しい夏、落ち葉の感傷的な秋、そしてしんしんと降る雪。年の変わり目である新年前後は、歳時記では一つのシーズンとして加えられている。

ふゆこ「日本語では雪といってもいろいろの言葉や意味があります。「風花」といえば、ちょうど降り始めた大きな雪片が、花びらが散るように風に吹かれて落ちてくる様子を言います。季語を細かく説明した辞書があります。大きなものでは4つの季節と新年を加えた5冊もの歳時記があって、それには莫大な知識がつまっております、おのおの季語に名句が載っていてアンソロジーになっています。オランダの季語にあたる言葉をひとつ入れて作ってみてください。紅葉、雪、戦没者記念日（著者注5月4日の夕、解放祭前夜）

など、シンプルで明白な言葉で結構です。」

4) 素晴らしい出逢い

ハイクを鑑賞するには、注意が必要だ。

ふゆこ「ひとつのハイクには作者と読者2人が必要なのです。読者が一句の真髓を読み取らなければなりません。洞察力ある、経験ある読者と一句を分かち合う、それがハイクの核心です。読者として大切なことは、いっぺんにたくさんのハイクを読むのではなく、ひとつづつ心のなかで消化させるのです。その一句があなたにとってどういう意味をもつのだろう、と考えてください。一句にはいろいろの解釈が可能です。ですからハイクについて学び、作者について知ることは楽しいことです。いわば素晴らしい出逢いがあるのです。」

有名な俳人一茶（一杯のお茶という意味）はよく小さな傷つきやすい動物や虫などを愛情をもって詠っている。それらを読むには、一茶が一生にどんなに多くの苦難を耐えたかを知ると、より深く鑑賞できる。彼の母親は彼が3歳の時に亡くなり、後には妻と子供をなくしている。彼が9歳のとき作った俳句がある。

「われと来て遊べや親のない雀」

オランダ語訳

雀の子よ
お前の母さんも死んじゃったんだろ
一緒に遊ぼうか

5) 基本に戻ろう

シンプルで純で偏見のない視点、ハイク作りには初心者の心意気が要る。そして熟達したつくり手になるには何年もの修行が必要だ。ハイクを作るということは、その長い行程を得て純粹さに到達する過程をいう。純粹な経験、つまり自分が宇宙とひとつになってスピリチュアルな洞察力を得ること、それをハイク道という。(著者注歌道のこと)

ふゆこ「俳句はただ木や花を描くのではありません。ひとつの花に宇宙を見、その花が、ほんの少ない言葉であなたの中のなにかと繋がれば、あなたの世界とまわりの世界とがひとつになります。それが真実の瞬間、命への理解が生まれる瞬間です。読者がそれを読んで、わっ、そのとおり、自分は見過ごした、だれかがそれを初めて言葉にしてくれた、と言うでしょう。」

「山路きてなにやらゆかしすみれ草」
芭蕉

6) 外に出よう

「過去の賢者の道をたどるな、賢者が探したものをさがせ」と俳句マスター芭蕉は書いている。ハイクモーメントを探し見つけることは、いわば自然メディテーションともいえる。ハイクはコンピュータに向かって作るものではない。外界に直接接触するというのが不可欠である。自分自身で感ずる、聞く、見る、においをかぐ、味わう。庭に出よう。森や砂丘の小道を歩こう。何が見えるか、なにに季節が感じられるか、どんな小さなことがあなたの関心を引くか。葉にしがみついている雨粒とか、小道に落ちる木漏れ日とか、稲の茎を這い上がるカブトムシとか、

全部がハイクの素材になる。もし外へ出たくないなら、家の戸の蜘蛛の巣でもいい。一番難しいのは、その感じたことに、いいとか悪いとか判断をくたさない、ということだ。禅の心でみること、あるがままに。純真にあなたが感じたことを、大げさな修飾をせず、美化せず、あなたのエゴを入れず、描くのだ。それがハイクのお道タオというものだ。すべての皮を取り去った時、つまりすべての余分な描写を取り去ってシンプルな客観性を得た時、だれもの心に響く瞬間をとらえることができる。読者が「あっ」と言うにちがいない。

もしかして作句は自分自身と、そして宇宙と出逢うための試みかもしれない。たとえ成功しなかったとしても、微笑みながら宇宙をみようとするのも一案だ。

ふゆこ「笑うということはそれだけで元気がでます。それが天の意志です。私はユーモアのある俳句が好きです。川柳という別の分野もあります。」

深—く考えながら

見てますよ 蟻が運ぶ

小さなものを

作者不明

(訳者注オリジナルがわかりません。)

7) 自分自身への洞察

また純粹な経験を俳句に描くことによって、自分自身への洞察を得ることもできる。ふゆこ氏は自身40歳になってから短歌や俳句を作りだした。その頃すでにオランダに長く住んではいたものの、母国と母国語から切り離されたように感じていた。日本語でそれらを書くことは絆を回復することでもあった。

「黒鉄の風鈴白夜を鳴り止まず」

ふゆこ

ふゆこ「この俳句は名句「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」という俳句からインスピレーションをもらいました。ある時庭に黒鉄の風鈴をつるしました。風が吹くとちんちんと鳴ります。日本の寺で僧が壺を清めるためにならず黒鉄の鈴のように清らかな音がします。白夜というのは日本にはありませんから、異国のシンボルです。それはまた異邦人としての心を揺さぶります。鈴音は望郷の思いをかりたてます。時には優しく、時には激しく、風はどこでも同じですから。今は安らかに鳴っています。(笑)」

「俳句を作ることによって、命の核心に触れることができるから、自分の天命がなんだかわかってきます」、とふゆこ氏は言う。たぶん我々も彼女のように人生の軽みを見ることができるともかもしれない。

ふゆこ「結局は自分が幸せになることが天命だと思います。人生なにをしたかということはあまり重要ではないかもしれませんね。どんなに楽しく生きたかが大切なのかもしれません。」

羽のように軽い詩、世界の重い心を引力で引きさげ、同時に持ち上げ、頭の中で一瞬無引力の世界に浮遊する、ハイクを読んでそんな一瞬を経験でき

るのが、ハイクの素晴らしいところであるのだろう。

あたかも最初に

じっと考えなければならなかったように
雨が一粒降ってきた

作者不明

(訳者注オリジナルがわかりませんのでオランダ語から訳)

参考

www.fuyukotomita.com

Haiku, een jonge maan by J.van Tooren
(オランダで初めて俳句を紹介した人)

テキスト アナ・ヴェスリング

コラム 富田冬子アムステルダム俳句

詩人富田冬子氏(1943)は日本で大学を卒業後、アイオワ大学で一年創作を学んだ。国連勤務後1970年にオランダに渡り結婚、2児を得た。ライデン大学の「日本研究プログラム」に貢献。彼女の短歌や俳句は何百万部もの発行部数を誇る朝日新聞などに掲載され、数々の賞を受賞。近年の句集「風鈴白夜」歌集「還れ我がうた」。アムステルダム在住。